

国土調査課

保存用

周防灘周辺開発地域

土地分類基本調査

宇部

5万分の1

国土調査

山口県

1973

序 文

最近の、わが国の経済発展は、その発達史上前例がなく、加速度的で、それは同時に都市・農村・漁村において過密・過疎現象を生み、深刻な社会現象を生じてまいりました。限定された国土に、このような二つの現象が生じてきたことに対し、これを計画的・合理的に利用することが、いまのわが国にとって緊急かつ重要な課題となってきたのであります。このような現況と、将来における経済社会の基本的発展方向を示唆するため、地域の特性に応じ、自然と人間の調和をはかりながら国土を有効に利用し、開発し、保全するための新全国総合開発計画が、昭和44年5月に策定されたのであります。

当県の西南部に位置する周防灘周辺地域は、気候的な自然条件にも恵まれ、地理的には山口・福岡・大分にまたがり、本州と九州を連絡する交通上の要衝でもあるなど立地条件にすぐれ、これが当地域を生活圏とする住民に及ぼすメリットは計り知れないものがあるにもかかわらず、地域が広く、3県にまたがるなどして、その総合的利用の検討はされなされたのであります。

今回、国土調整事業の一環として、新全国総合開発計画に基づいた開発プロジェクト単位に、地形・表層地質・土壌等の土地条件、気象条件、土地利用現況、土地保全条件ならびに開発規制因子等を科学的・総合的に調査し、その実態を明らかにするため、当県においては昭和47年度以降これら開発地域分類基本調査を実施することになり、47年度は「小郡」「宇部東部」今年度は「宇部」「厚狭」の作成をおこないました。

当冊子では、「宇部」図葉の地形・表層地質・土壌および開発規制因子等について調査をおこなったので、この結果を有機的に組み合わせ、自然を荒廃させることなく土地資源の開発・保全・合理化・高度化のため、広く関係者が利用されることを切望する次第であります。

調査にあたっては、経済企画庁の助成と調整を得て、山口県開発地域土地分類基本調査作業規定に基づき、建設省国土地理院発行の縮尺5万分の1地形図を基図として、図簿の作成、資料集収をおこないましたが、これに、ご協力いただきました各位に対し、深く謝意を表する次第であります。

昭和 49 年 3 月

山口県企画部長 義 始 繁 人

調 査 担 当 者

総括企画調整編集	山口県企画部企画開発課 同 併任山口県教育庁総務課	課 長 国土調査係長 指 導 主 事	杉 山 林 造 木 村 喜 保 宇多村 讓
地形分類調査	山 口 大 学	教 授 助 教 授	小 野 忠 熙 三 浦 肇
表層地質調査	山 口 大 学	教 授 同 同 同 助 助 授 理 学 博 士	高 橋 英太郎 河 野 通 弘 岡 村 義 彦 村 上 允 英 三 上 貴 彦 西 村 祐二郎
土 壤 調 査	山口県農業試験場 山口県林業試験場	地力保全室長 専 門 研 究 員	井 尻 敏 文 藤 原 俊 廣
傾斜区分図	山 口 大 学	教 授 助 教 授	小 野 忠 熙 三 浦 肇
水系谷密度図	山 口 大 学	教 授 助 教 授	小 野 忠 熙 三 浦 肇
土地利用現況図	併任山口県教育庁総務課	指 導 主 事	宇多村 讓
開発規制図	併任山口県教育庁総務課	指 導 主 事	宇多村 讓

目 次

序 文

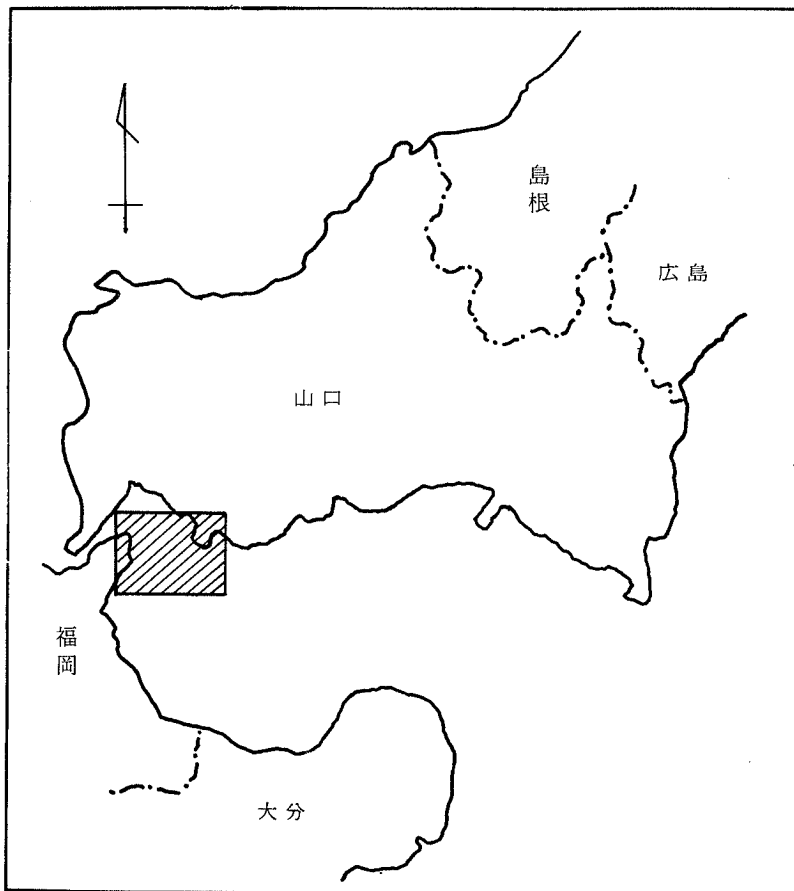
総 論

I 位置および行政区画	
1 位 置	1
2 行政区画	1
II 地域の特性	
1 自然的条件	2
2 社会経済的条件	3
III 主要産業の概要	5
IV 開発の現状	5

各 論

I 地形分類	
1 地形の概要	7
2 地形細説	7
II 表層地質	
1 表層地質の概要	11
2 表層地質細説	11
III 土 壌	
1 土壌の概要	14
2 土壌細説	15

「宇部」位置図



1. 位置および行政区画

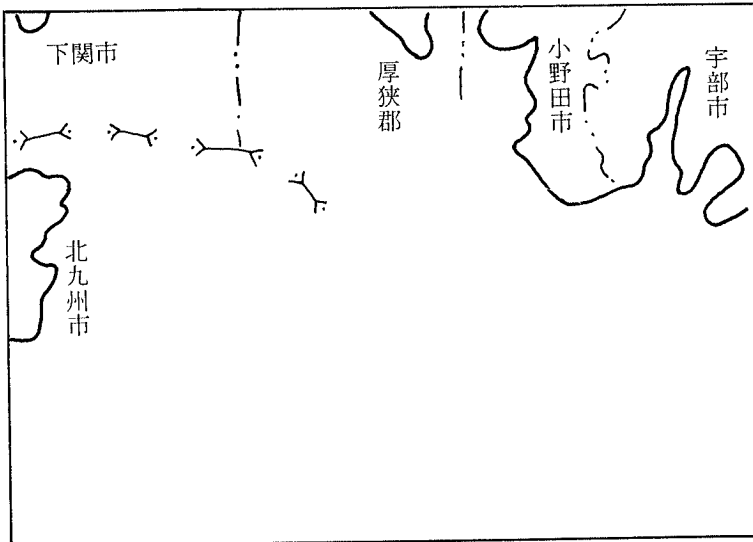
1 位置

「宇部」図葉は、本州西端部に位置し、経緯度は東経 $131^{\circ}0' \sim 131^{\circ}15'$ 、北緯 $33^{\circ}50' \sim 34^{\circ}0'$ で、図案内の陸地面積は、 46.12 km^2 である。

2 行政区画

「宇部」図案は、下関市・小野田市・宇部市・北九州市および山陽町の4市1町の行政区画からなる。このうち、下関市・北九州市は、福岡県で作成した「小倉」で取り上げられており、また山陽町は一部が包含されるだけなので除外する。

行政区画



Ⅱ 地 域 の 特 性

1 自然的条件

(1) 気象条件

当図葉内には観測所がないので、隣接する宇部観測所の資料を使用する。
年平均気温は 13°～14° C、年間降水量は1600～1700mmで冬期少なく、梅雨期の6・7月と台風襲来期の9月に集中し、その量は、年間降水量の47%に達する。冬期は山陰型の曇天が多く、また降水量が多いことなどから、気候区は瀬戸内海型よりも北九州型に近い。
(1968～1972)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
平均気温	4.92	10.7	7.37	13.15	17.63	21.22	25.94	26.82	23.87	17.14	12.09	7.13	13.65
最高気温	9.16	19.82	12.20	18.32	22.54	25.36	29.54	30.72	27.90	22.20	17.22	11.78	20.56
最低気温	0.68	1.58	2.54	7.98	12.72	17.08	22.34	22.92	19.84	12.08	6.96	2.48	10.75
降水量	88.20	86.40	85.4	13.30	161.8	300.2	364.4	146.8	167.0	71.6	58.0	67.4	1712.2

・平均気温、最高気温、最低気温……平均 降水量……総計 (単位: 1°C, 1mm)

観測所の位置

観測所名	所在地	設置箇所	北緯	東経	海拔
宇部	宇部市中宇部	宇部農芸高校	33°58.2′	131°16.3′	7 m

(2) 土地条件

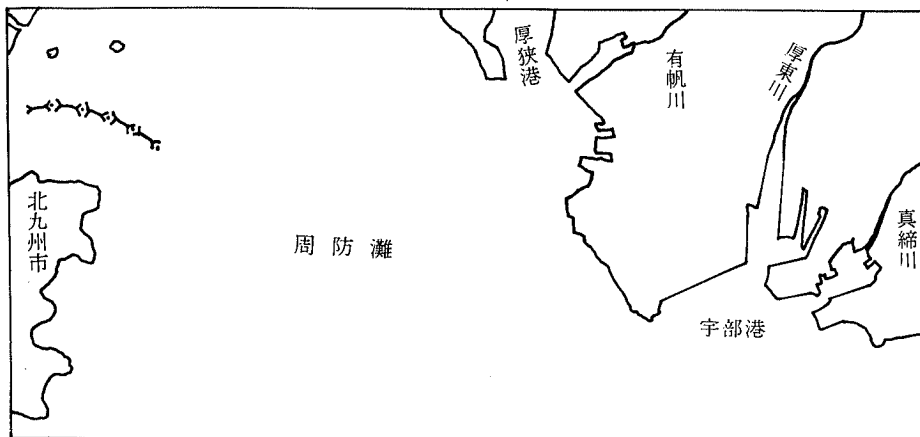
当図葉西部の北九州側の小起伏山地を除くと、小野田市の竜王山(136.2m)が最高で、他は100m以下の小起伏丘陵地を形成する。

厚東川、厚佐川が瀬戸内海に注ぐ下流域には、埋立・干拓によって瀬戸内沿岸平野が小規模に発達し、宇部市および小野田市がそれを基盤として発展している。

主な河川は有帆川および厚東川で、いずれも瀬戸内海に注ぎ、河口での現世堆積物は、厚い場所で100mに達する。

地質は、北九州市側が古生代の地層を主とするのに対し、小野田市竜王山の結晶片岩を除けば、丘陵地のほとんどは第三紀層の砂岩・頁岩より構成される。

主 要 河 川 図



2 社会経済的条件

(1) 道 路

当図葉内は、国道1路線、主要県道2路線、一般県道5路線が主な道路である。交通量の増大に伴ない、宇部市中原において2870mにわたり拡巾工事が進められている。

(国 道)

(主要地方道)

(路線名)	(起点)	(終点)	宇部船木線	小野田美東線	小野田港線
190号線	小郡	厚狭	宇部秋芳線	迫田梶厚狭線	
			宇部美祢線	妻崎開作小野田港線	

(2) 鉄 道

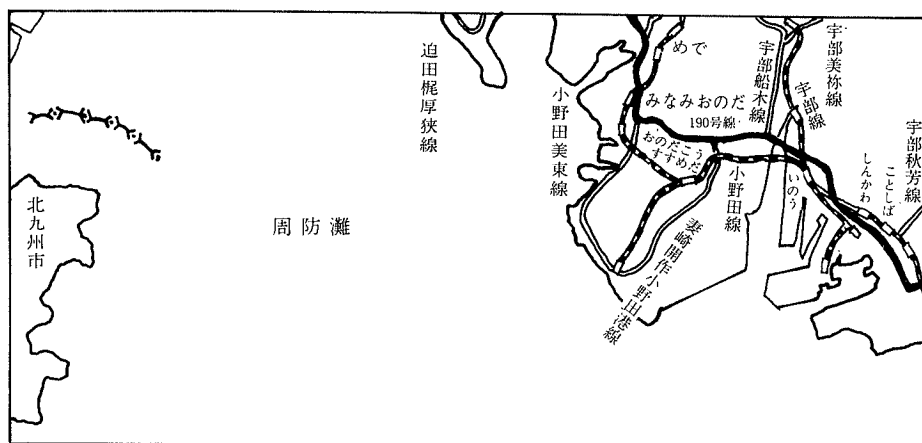
山陽本線の支線としての宇部線および小野田線が敷設されている。

線 別	年	乗 車 人 員		1日平均	旅 客 取 扱 収 入		貨 物 輸 送 量		貨 物 取 扱
		総 数	(内)定期	(内)定期	総 数	(内)定期	発 送	到 着	収 入
宇 部	42	9808	7702	27	736943	116172	711	3471	1239886
	46	7118	5188	20	954533	107677	704	6974	1337206
小野田	42	2567	2037	7	75201	27458	206	972	240048
	46	1703	1270	5	82345	22631	187	914	236647

() 内は42年を基数とする増減率

(単位1000人, 1000 t, 1000円)

道路・鉄道位置図



(3) 人口の動き

昭和35年から45年にかけて、宇部・小野田地域は炭鉱の閉山に伴ない、小野田市においては世帯数・人口共に減少、宇部市においては、世帯数の増大をみながらも人口は減少している。両市について、人口の減少を35～40年、40～45年の2期に分けてみると、小野田市は11608人から1541人と減少が緩和しているのに対し、宇部市は7637人から6051人とその減少は等比的である。

人口の動き

項目 市名	昭和35年国勢調査		昭和40年国勢調査		昭和45年国勢調査	
	世帯数	人口総数	世帯数	人口総数	世帯数	人口総数
小野田市	12788	55192	11211	43584	11764	42043
宇部市	38806	166623	39566	18986	43327	152935

項目 市名	増		減		増		減		率	
	世帯(40)	世帯(45)	人口(40)	人口(45)	世帯(40)	世帯(45)	人口(40)	人口(45)		
小野田市	▲1577	▲1024	▲11608	▲13149	▲12.3	▲8.0	▲21.0	▲23.8		
宇部市	760	4521	▲7637	▲13688	1.9	11.6	▲4.5	▲8.2		

資料：国勢調査

・増減数、増減率は35年を基数とする。

Ⅲ 主要産業の概要

宇部～小野田地域の40～45年にわたる産業の推移をみると、両市で共通して減少しているのは、農業、林業・狩猟業、鉱業で、特に鉱業はエネルギー転換による石炭産業の衰退に伴ない、宇部市 7.1%、小野田市38.4%と大幅に低下している。一方、水産業、製造業、卸売及び小売業、運輸・通信業、サービス業は共通した上昇を示している。一般に、第1次産業が衰退し、第3次産業の発展がいちじるしい。

市町村の就業人口（45年）

市別	年	総数	第1次産業			第2次産業			第3次産業			その他
			農業	林業 狩猟業	水産業	鉱業	建設業	製造業	卸売及 小売業	運 輸 通信業	サービ ス 業	
宇 部	40	71168 (106.1)	8815 (86.3)	31 (38.7)	1298 (127.8)	3429 (7.1)	7002 (118.6)	16060 (114.1)	15313 (110.1)	4437 (127.9)	10741 (116.7)	4018
	45	75579	7613	12	1659	244	8306	18327	16868	5677	12545	4320
小野田	40	18884 (109.6)	2118 (84.3)	7 (57.1)	171 (197.0)	382 (38.4)	2447 (98.8)	4670 (132.4)	3340 (107.3)	1645 (102.4)	2739 (114.2)	1362
	45	20706	1787	4	337	147	2420	6185	3586	1686	3128	1426

資料：国勢調査

- ・ () は40年を基数とした増加率
- ・ 総数は各産業＋その他十分類不能（省略）

Ⅳ 開発の現状

当図葉内の小野田市・宇部市は、地域的にも経済的にも一体的な市街地を形成し、最近では、産炭地振興にそい各種企業の進出を加え、瀬戸内海沿岸部に沿い化学、窯業、機械・石油精製等の企業が操業している。また、上下水道、ごみ・し尿処理施設都市公園などの生活基盤の整理、国・県道の交通基盤の整理なども、同時に進められている。

このように、当地域は、工業開発にすぐれた立地条件を有しているため大規模工業都市として発展しつつあるが、それは同時に多大の降下ばいじんをもたらす危険性もあり、それには全国に先がけ宇部方式を生み出すなどの努力が重ねられて来ているが、今後ともなお一層の対策が必要である。

(宇多村 譲)

各 論

I 地形分類

1 地形の概要

図幅の北東部に、山口県の小野田半島、宇部半島の一部があり、西部には福岡県の企救半島の一部が見られる。企救半島は、小起伏山地の沈水よって屈曲に富む海岸線をつくり、低地に乏しい地形であるのに対して、山口県の小野田、宇部付近はきわめて平夷な丘陵地の発達をみ、砂礫台地、三角州平野、干拓地、埋立地などの低地の占める比率が高く、対照的な地形を示している。図幅の北西隅に、山口県下関市長府の埋立地の一部と小島嶼が見られる。本図幅における地形の性状と分布を説明するため、次の地形区に区分した。

I 山地

I a 企救^{くき}山地 I b 霜降^{しもふりだけ}岳山地

II 丘陵地

II a 津布田丘陵 II b 厚狭^{あさ}丘陵 II c 厚東^{こうとう}丘陵 II d 宇部丘陵

III 島嶼

III a 千珠島 III b 満珠島

IV 低地

IV a 長府低地 IV b 後潟低地 IV c 小野田低地 IV d 厚東^{こうとう}低地
IV e 宇部低地

2 地形細説

I 山地

I a 企救山地

企救山地の東部は、小地塊群の開析が進んで、高度 200 m 前後を示す小起伏山地が沈水して屈曲の多い輪郭をあらわしている。図幅内での最高所は、打越山の 177 m で、次いで平山の 173.7 m があり、この付近は 30° 以上の傾斜をもつ部分であるがそのほかは、おおむね 20° ~ 30° の斜面をなすところが多い。沿岸では、海上積出に好条件の岬端部が、いたるところ採石場となり、主に黒色頁岩やホルンフェルスが採掘されていて、峨々たる露頭景観を呈し、部崎付近の採石場では、100 m 以

上に及ぶ急崖が見られる。これとは対象的に小湾頭には小規模な谷底平野，三角州，砂州が発達しており，いずれにも半農半漁の小集落が見られる。どの小湾入にも，砂州が発達しているのは，周防灘の北西部にあって，この海域における最大の対岸距離方向に面しているため，周防灘における最大風波の影響を受けやすく，砂州地形の発達には好条件の位置にあるといえるだろう。なかでも，大積海岸には3列の砂州（実際には礫州である。）が見られ，第1列と第2列の間に潟湖がとり残され，第2列と第3列の間の入江も潟湖化しつつある。

I b 霜降岳山地

字部丘陵の侵食平坦面より，一段高く残丘となってそびえる霜降岳山地の西斜面の一部が，図幅の北東隅にわずか見られる。

II 丘陵地

II a 津布田丘陵

津布田丘陵はその大部分は，厚狭図幅にあり，その南端が本図幅に見られるが，これは小起伏山地として区別した火ノ山の一部である。

II b 厚狭丘陵

厚狭低地をとりかこんで発達している起伏量 $50\text{m}/1\text{km}^2$ のきわめて平夷な丘陵でその南端の一部が本図幅にあらわれている。ここには，高度 50m にみえない2つの小丘が洪積台地につながっているが，北側の小丘は第三紀層の岩石，南側の小丘は三郡変成岩の黒色片岩からなり，ともに台地状の地形となっている。

II c 厚東丘陵

厚狭図幅，小郡図幅にわたって典型的に見られる丘陵で，厚狭丘陵と同じ特徴をもつ低位の侵食平坦面である。本図幅でも，地質的には主に第三紀層の分布地域に相当し，最高所は亀ノ甲付近の 50m に過ぎず，いちじるしく平坦化の進んだ丘陵であって，その縁辺では洪積段丘に漸移するところが多く，とくに南部では高さもさらに低くなり， $30\sim 20\text{m}$ で，地形上丘陵と段丘の区別の困難なところが多い。

竜王山は，この丘陵にふくめて区分したが，最高点 136.2m の小起伏山地で，主として三郡変成岩類の緑色片岩からなり，北東側と南西側を断層によって限られた，開析の進んだ孤立的な小地塊である。

II d 宇部丘陵

厚東丘陵に類似した性質の丘陵で、宇部東部図幅において典型的に発達しておりその西部が本図幅に見られる。その北半の花崗岩の部分の高度は 100m 前後を示して、起伏も大きい。南西部の第三紀層の部分は高度 50m 以下の台地類似の低い丘陵となり、南部の蛇紋岩の部分では谷密度の低い平頂状の丘陵となっている。

III 島嶼

III a 千珠島 III b 満珠島

下関市長府沖合にあって、ともに白亜紀の黒雲母花崗岩からなる小島である。島の最高点は千珠島 15.0m、満珠島 49.6m である。

IV 低地

IV a 長府低地の一部が、図幅の北西隅に見られ、工場用地として造成された新しい埋立地である。

IV b 後潟低地

厚狭川河口の低地で、本図幅に見られるのは左岸は干拓地であり、右岸の半島先端の低地は炭鉱廃土による埋立地である。

IV c 小野田低地

有帆川河口一帯の低地で、大部分が干拓地と埋立地である。小野田市街地が発達している部分も明治 4 年石炭採掘の目的で造成された小野田新開作の干拓地の一部である。地盤が低く排水不良地が多い。

IV d 厚東低地

その主要部は厚狭図幅にあって、本図幅には自然堤防と氾濫原の一部が見られる。

IV e 宇部低地

厚東川河口の低地帯で、大部分が干拓地や埋立地からなる。それに、宇部市街地後背の真締川の三角州平野をふくめて、宇部低地とした。この低地の原形は、三角江型の三角州平野で、広瀬の狭隘を出た河口部に小規模な三角州があり、湾内に広く潮汐平地が形成されていたと考えられる。際波には、大きく曲流する二条の旧河道があり、その末端付近までが三角州平野で、それ以下の低地は地割の特徴からも干拓地と見なされる。上開作は天明 2 年 (1782)、中野開作は天明 7 年 (1787)、

妻崎開作は文化4年(1807)、妻崎新開作は安政6年(1859)に成立している。この干拓地の西縁には、旧汀線を推定させる砂堆の微高地があり、妻崎や黒石付近には、3ヶ所認められる。また、波多野開作付近から浜河内にかけての旧海岸線付近には、顕著な3列の砂堆が残っている。もっとも内側のものは、須賀という砂州地名をもつ集落がのっている砂堆地で、高度は6～7.5mであり、第2列目の砂堆は2.4kmに及び、北東部で7m、南西部で5～6mの高度を示している。第3列目の砂堆と合するところもあり、高度は約5mで、干拓地との境界をなすようである。

本山半島から長沢にかけての洪積台地の中には、埋積の進んだ浅い小谷が無従的に入りこみ、丘陵様の景観を見せ、開析台地の特徴をよくあらわしている。

宇部市街地の主要部がのる砂堆地は、図幅内での最大幅400m、高度は4mで、北西端居能付近でわずかに分岐する。この内側は後背低湿帯をなし、長く排水になやんだところであるが、寛政10年(1798)砂堆を切断して真締川の現流路を完成した。この砂堆より海側の工場地帯は大部分が海底炭坑の廃土による埋立地である。

資 料

- 1 小野忠熙(1962)：新田成立の自然的基礎 地理科学2
- 2 貝塚爽平(1950)：中国地方西部の地形 東大地理学研究1
- 3 河野通弘・高橋英太郎・小野忠熙(1965)：本州西端部海岸の洪積層とその問題 山大教育学部研究論叢14-2
- 4 河野通弘・小野忠熙(1969)：中国地方の第四系、日本の第四系、地学団体研究会
- 5 桑代勲(1959)：瀬戸内海の海底地形 地理学評論32-1
- 6 経済企画庁総合開発局(1973)：1：200000土地分類図(地形分類図)山口県
- 7 建設省計画局・北九州市(1968)：北九州地区の地盤 都市地盤調査報告書第18巻
- 8 国土地理院(1971)：1：25,000 土地条件図 宇部
- 9 国土地理院(1971)：1：25,000 土地条件図 小倉
- 10 国土地理院(1971)：1：25,000 土地条件図 下関
- 11 鈴木倉次(1950)：宇部地方の地形研究 山大理学会誌1

- 12 高橋英太郎・河野通弘 (1968) : 山口県における第四系一主として洪積統一と対比について 山大理科報告 18
- 13 浜田清吉 (1950) : 周防灘干拓地に於ける災害の性格 山大理学会誌 2-2
- 14 松本繁樹 (1961) : 宇部市周辺海域の沖積統下底面の地形 地理学評論 34-11
- 15 松本繁樹 (1962) : 宇部付近の海岸段丘 東北地理 14

(三浦 肇 小野忠熙)

II 表層地質

1 表層地質の概説

東北側の霜降岳山地は、三郡変成岩類・蛇紋岩および花崗岩よりなり、このうち三郡変成岩類および蛇紋岩はNE～SWの方向の分布を示している。中央部の竜王山山地は、三郡変成岩類よりなる。その走向はNE～SWを示す。西部の企救半島山地東部は、古生層および中生層よりなり、その走向はNE～SWを示している。宇部丘陵は古第三紀層よりなり、宇部台地は洪積層よりなる。宇部低地は沖積層よりなる。

2 表層地質細説

I 未固結堆積物

I a 砂 (s)

海岸沿いに発達する。

I b 礫・砂 (gs)

礫・含礫砂・含礫粘土質砂の互層で、白色および褐色火山灰を含む。

I c 粘土 (sm)

泥およびシルトの互層からなる。

地層および岩石一覽表

地質時代		地質系統	表層地質分類		
新 生 代	第 四 紀	沖積世	沖積層	砂 礫・砂	未固結堆積物
		洪積世	吉南層群	礫・砂 粘土	
	第三紀	始新世	宇部夾炭層 厚東川礫岩層	砂岩 礫岩・砂岩・泥岩互層 砂岩・シルト互層 礫岩	固結堆積物
中 生 代	白 亜 紀	浦河世 ～ギリャーク世	花崗岩	花崗岩	深成岩
		宮古世 ～有田世	関門層群	礫岩・砂岩・頁岩互層	固結堆積物
古 生 代	二 疊 ・ 石 炭 紀		古生層	砂岩・頁岩互層 石灰岩 チャート 礫岩	堆積物
			蛇紋岩	蛇紋岩	深成岩
			三郡變成岩類	黒色片岩 綠色片岩	變成岩

II 固結堆積物

II a 礫岩 (cg)

礫岩には厚東川礫岩層に属するものと古生層に属するものがある。後者は企救半島白野付近にわずかに分布する。両者ともによく固結している。

II b 砂岩 (ss)

宇部夾炭層に属する。時に含礫砂岩となる。

II c 礫岩・砂岩・頁岩(泥岩)互層 (alt gsm)

宇部夾炭層に属するものは、礫岩・含礫砂岩・砂岩・泥質砂岩・シルトおよび泥岩の互層に白色火山灰および炭層を夹む。礫岩・含礫砂岩および砂岩は固結しているが、泥質砂岩・シルトおよび泥岩は半固結である。

関門層群に属するものは企救半島北端に分布する。砂岩および頁岩は赤紫色または黒灰色を呈し、所によって凝灰質となる。

II d 砂岩・頁岩(シルト)互層 (alt sm)

厚東川礫岩層に属する互層は砂岩・シルトからなりよく成層している。

古生層に属する互層は企救半島に分布し、よく固結し堅硬である。所により礫岩を夹む。

II e 石灰灰岩 (ls)

古生層に属し、企救半島打越山および櫛ノ鼻海岸に分布する。赤紫色または灰褐色を呈し凝灰質である。海ユリ化石(梅花石)を産する所がある。

II f 珉岩質岩石 (ch)

企救半島北東部の古生層中にNE-SW方向で帯状分布する。赤褐色・赤紫色および灰褐色を呈する。塊状またはよく成層している。

III 深成岩

III a 花崗岩 (Gr)

広島型の粗粒～中粒黒ウンモ花崗岩で、マサ化がいちじるしい。

III b 蛇紋岩質岩石 (Sp)

塊状・片状および角礫状のものがある。東北部で花崗岩に近接する部分は熱変成をうけている。蛇紋岩上に厚さ1m以上の栗色粘土が被っている。

IV 変成岩

IV a 黒色片岩 (Bs)

東北方の花崗岩に接する部分では熱変成をうけている。

IV b 緑色片岩 (Gs)

竜王山北部では熱変成をうけている。

V 応用地質

V a 鉱泉

鉱泉名	所在	泉質
五嶋鉱泉	宇部市中山	放射能泉
江ノ尻鉱泉	小野田市南中川	含芒硝重ソウ泉

資料

- 1 山口県 (1972) : 土地分類基本調査 (宇部東部)
- 2 経済企画庁総合開発局 (1973) : 縮尺 1/20万土地分類図 (山口県)

〔 高橋英太郎 河野通弘
岡村 義彦 村上允英
三上 貴彦 西村祐二郎 〕

III 土 壤

1 土壌の概要

I 山地・丘陵地の土壌

本図幅地域は、宇部・小野田両市にまたがる宇部丘陵南部と、北九州市門司区に属する企救半島東端の山地が含まれる。宇部丘陵は、ゆるやかな起伏を示す老年期地形からなり、土壌は第三紀層・結晶片岩を母材とする乾性褐色森林土壌 (黄褐色・赤褐色) と花崗岩、中生層、古生層を母材とする乾性褐色森林土壌、および蛇紋岩を母材とする暗赤色土壌が分布している。そのほかは小面積であるが、竜王山の谷筋の凹部に褐色森林土壌 (黄褐色) が分布する。

企救山地は、主として古生層堆積岩からなり、尾根筋から山腹の尾根型斜面に乾

性褐色森林土壌（黄褐色系）が、山腹下部ないし凹部に褐色森林土壌（黄褐色系）が出現する。また山頂、山麓の緩斜面には、赤褐色の乾性褐色森林土壌が出現している。

II 台地・低地の土壌

低地は、厚東川下流宇部市街地周辺に広く分布するほか、有帆川下流小野田市街地周辺に分布している。

これら低地は、市街地、工場用地などを除く部分が水田として利用されている。また海岸ぞいは干拓が進められており、工場用地のほかは水田として利用されている。一方低地に続く洪積および三紀層の台地は、以前から山林や畑地、一部水田として利用されていたが、近年は住宅地として利用されるようになってきた。

本図幅内に分布する台地、低地土壌は断面形態、母材、堆積様式の異同によって、3土壌統群、12土壌統に区分された。

厚東川、有帆川沖積地は、灰色低地土壌およびグライ土壌からなり、河川に近い地帯はグライ土壌が多く分布している。

海岸平野や干拓地は、グライ土壌や粗粒グライ土壌が多い。

（井尻敏文 藤原俊廣）

2 土 壌 細 説

I 山地・丘陵地の土壌

乾性褐色森林土壌

花崗岩類、中生層、古層からなる山地・丘陵地の尾根筋から山腹にかけて、広く分布する乾性土壌である。

1) 右田岳1統 (Mig 1)

花崗岩類を母材とする乾性土壌で、全土層が浅く、砂礫質で、A層は非常に薄いがあるいは、欠く場合が多い。A層には、外性菌根菌が混在して菌糸網層が形成され、帯白色となることがあり、密な母岩の風化物の上に堆積している。

2) 右田岳2統 (Mig 2)

この土壌は、右田岳1統と同一地域の、斜面から山麓に分布する乾性土壌で、上記1統土壌に比べて土層が深く、A層に菌糸の混入はみられない。全土層は、砂礫質で淡色を呈し、やや未熟な感じが残っている。林木の成育は不良である。

3) 荒滝山1統 (Ara 1)

中生層、古生層を母材とする。山地・丘陵地の尾根筋に出現する、乾性の土壌である。全土層は浅い。乾燥環境下にあり、A層の発達が悪く、B層への腐植の浸透はみられない。林木の成育上良好な土壌ではない。

乾性褐色森林土壌 (赤褐色系)

低山の山麓地や、丘陵地の比較的幅広い尾根筋に分布する。とくに本図幅では、第三紀層と結晶片岩を母材とするところに出現する。

4) 宇部1統 (Ube 1)

第三紀層を母材とするやや未熟な赤褐色の乾性土壌で、腐植に乏しく、A層が薄い。B層は堅密で、埴質である。全土層は深く、地形が小起伏丘陵地のため、人工改変が容易で、宅地化しつつある。林木の成育は不良である。

5) 小野統 (Ono)

第三紀層以外の岩石を母材とする赤褐色の土壌で、一般に埴質で堅密な堆積をしている場合が多い。A層の厚さは薄く、B層への腐植の浸透も悪いので、林木の成育は不良である。

6) 宗像1統 (Muk 1)

A層は薄く、B層への腐植の浸透が悪い。全般的に粘土質で、赤褐色のB層は堅密で、林木の生育には良好でない。

乾性褐色森林土壌 (黄褐色系)

低山地の尾根筋や、丘陵地の中復斜面に出現する。黄褐色の乾性土壌である。

7) 宇部2統 (Ube 2)

第三紀層を母材とする丘陵地の斜面に出現する。乾性の土壌である。埴質と砂礫質のものがあり、堅密で、B層への腐植の浸透も悪く、林木の成育は不良である。

8) 大平山2統 (Ohi 2)

結晶片岩類を母材とする山地・丘陵地の、山腹斜面上部から中部にかけて分布する。A層はやや発達しているほか、B層への腐植の浸透もみられるが、乾性の環境条件下にあり、林木の成育はあまり期待できない。

9) 築前1統 (Chz 1)

主として山腹の尾根型斜面と、土壌浸蝕の影響をあまり受けていない尾根筋に出

現する。

A層はやや発達しているが、乾性な環境下にあるため、B層への腐植の浸透が乏しく、林木の成育にはやや不良である。

褐色森林土壌（黄褐色系）

山地・丘陵地の斜面下部や、沢筋の崩積面に分布する黄褐色の土壌で、水分、土壌養分にめぐまれ、林木の成育に、好適な土壌である。

10) 大平山3統（O h i 3）

この土壌は、大平山2統と同一地域の沢筋に出現する適潤土壌で、全土層は深く礫を混える。B層への腐植の浸透は良好で林木の成育に適している。

11) 築紫1統（C h s 1）

腐植に富むA層と、腐植の浸透の良好なB層があり、孔隙に富む比較的良好な断面状況を呈しているが、水分供給に乏しく、林木の成育はやや劣る。

暗赤色土壌

蛇紋岩などの超塩基性岩や、石灰岩を母材とする。暗色を帯びた乾性土壌で、埴質、堅密でB層への腐植の浸透が悪い。

12) 黒岩山統（k u r）

蛇紋岩を母材とする乾性土壌で、A層は暗褐色～黒褐色で薄く、B層は赤褐色を呈する。A層・B層とも埴質、堅密で、林木の育成は不良である。

資 料

- 1 山口県林業試験場（1956～1968）：民有林適地適木調査報告
- 2 経済企画庁（1971）：土地分類基本調査1／5万（防府）
- 3 福岡県（1971）：土地分類基本調査1／5万（小倉）
- 4 山口県（1972）：土地分類基本調査1／5万（宇部東部）
- 5 経済企画庁総合開発局（1973）：縮尺1／20万土地分類図（山口県）

（藤原 俊廣）

II 台地・低地の土壌

褐色低地土壌

本土壌は主に沖積地面に分布する水田土壌で、作土を除きほぼ全層が黄褐色を呈する。水田土壌化作用が未熟な比較的新しい沖積物を材料とする土壌である。

1) 井尻野統 (Iji)

山麓または台地丘陵斜面に接した低地に分布する黄褐色の水田土壌で、作土を除きほぼ全層が黄褐色よりなり、礫層は30cm以内に出現している。

細粒灰色低地土壌

本土壌は作土下の土色が灰色～灰褐色を呈する土壌のうち、作土下50cmの平均土性が粘質～強粘質の土壌である。本土壌の灰色または灰褐色土層は水田土壌化作用によって変成したB層で、斑鉄を含みときに鮮明なマンガン結核がみられる。

2) 四倉統 (Yot)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が強粘質であり斑鉄を含む。

3) 佐賀統 (Sag)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が強粘質であり、斑鉄のほか顕著なマンガン結核を含む

灰色低地土壌

本土壌は作土下の平均土性が壤質よりなる灰色～灰褐色の水田土壌である。それ以外の内容は前述の細粒灰色低地土壌と同じである。

4) 清武統 (Kyt)

低地に分布する灰色水田土壌で、土性はほぼ全層が壤質であり、斑鉄のほか顕著なマンガン結核を含む。

粗粒灰色低地土壌

本土壌は作土下の平均土性が砂質よりなるか、または30～60cm以内もしくは30cm以内より以下が礫層または砂礫層よりなる灰色低地土壌を包含する。

5) 国領統 (Kok)

地表面から30cm以内に礫層または砂礫層が出現する粗粒灰色水田土壌で、河川沿岸平坦地山地谷低面などに広く分布する。礫層または砂礫層上の土層は、おおむね灰色を呈し土性は、ほぼ壤質～砂質である。

細粒グライ土壤

本土壤は表層が灰色土層よりなり下層がグライ層よりなる土壤と、全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壤のうち作土下50cmの平均土性が強粘質または粘質のものである。

6) 幡野統 (Hat)

表層は灰色土層、下層グライ層よりなり作土下50cmの平均土性が強粘質の土壤で低地に分布する。

7) 田川統 (Ta)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壤で、作土下50cmの平均土性が強粘質であり、斑鉄は30cm以内に出現する。

8) 西山統 (Nis)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壤で、作土下50cmの平均土性が粘質である。斑鉄は30cm以内に出現する。

9) 東浦統 (Hig)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壤で、作土下50cmの平均土性は粘質である。斑鉄は50cmまでみられる。

グライ土壤

本土壤は作土下50cmの平均土性が壤質よりなるグライ土壤を包括したもので、その他の内容は細粒グライ土壤の項で説明したものと同様である。

10) 上兵庫統 (Khy)

低地に分布し、表層灰色土層、下層グライ層よりなり、作土下50cmの平均土性が壤質の土壤である。本統も土層中にマンガング結核を含むことが多い。

11) 滝尾統 (Tko)

全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層よりなる土壤で、作土下50cmの平均土性が壤質で、斑鉄は30cm以下にも認められる。

粗粒グライ土壤

本土壤は作土下50cmの平均土性が砂質よりなるか、または30cm以内から以下もしくは30~60cm以下が礫層または砂礫層よりなるグライ土壤を一括したものである。

12) 八幡統 (Y w t)

低地に分布する表層灰土層，下層グライ層よりなる土壤で，土性はほぼ全層が砂質である。

資 料

- 1 山口県農業試験場（1962）施肥改善事業成績書
- 2 山口県農業試験場（1968）地力保全基本調査成績書
- 3 農林省農業技術研究所（1973）土壤統の設定基準および土壤統一覧表（第一次案）
- 4 福岡県農業試験場（1969）水田および畑地土壤生産性分級図，福岡県北九州市近郊地域

（井尻 敏文）